

**実践**

**外国人児童の母語を使った在籍学級児童とのことばの交流**

**—多言語会話教材「はなしてみよう」を使った実践—**

内門香代子 (伊勢崎市立豊受小学校)・古川敦子 (大阪教育大学)

**実践の場の特徴**

本実践は総合の時間で行った。実践した4年生の学級には外国にルーツのある児童が4人在籍している。そのうちの1人Aは、来日後間もなく、1日2時間程度の日本語指導を受けているが、まだ日本語でのコミュニケーションが難しく、他の児童との交流が少ない。Aを学級の一員として受け入れ学習を進めていくためには、児童同士のコミュニケーションが不可欠である。だが日本人児童は第二言語での学習やコミュニケーションの困難さを理解していないことが分かった。そこで日本人児童がAの母語で会話することで双方の交流が促進され、さらに第二言語での学習等の困難さを理解できるのではないかと考え、本実践を行った。

**実践の目標**

- ・日本人児童がAの母語での会話表現を楽しみながら学び、外国人児童が第二言語で学習する困難さを理解する。
- ・Aが学級の児童とのコミュニケーションを始めるきっかけを作る。

**具体的な実践の内容とその過程**

児童同士が学校内で使う会話表現を多言語で記載している冊子『はなしてみようーきになるあの子となかよくなるうー』を教材とした。実践ではまず、児童が冊子の中から会話表現を選びペアやグループで練習した。その後A及び母語が同じ外国人児童Bの二人を相手に練習した表現で会話する活動を行った。実践後、活動の感想を書いた。

**結果と考察(目標の達成度・課題)**

日本人児童の感想には「Aの母語を話せてとても楽しかった」「他の外国語も勉強してみたい」等、活動を楽しんだ様子が書かれていた。その他「Aの母語は難しかった、覚えるのが大変だった」と外国語学習の難しさについて言及したものもあった。Aは母語支援員を通じ「みんなと話せて嬉しかった」と述べていた。活動後は日本人児童がAの母語を使ってAに話しかける姿が観察された。また、Aが日本語で話しかける姿も増えた。今後も外国人児童の母語や母文化に触れ、互いに交流できる活動を継続して実施したい。

.....

【引用文献】古川敦子(2017)「多言語会話集『はなしてみようーきになるあの子となかよくなるうー』の作成」『共愛学園前橋国際大学論集』17